

「子どもが自ら願いを形成し実現しようとする」

ということ(2)

鈴木 政 勝

前稿「『子どもが自ら願いを形成し実現しようとする』ということ(1)」の「はじめに」において具体的な例をあげて述べたが、子どもは、生き生活することにおいて、自ら願いを形成し、実現しようとする。そして成長・発達する。

この「子どもが、生き生活することにおいて、自ら願いを形成し実現しようとする。そして成長・発達する」ということは、一体どのようなことであろうか。

子どもが、自ら願いを形成し、実現しようとする、そして成長・発達する。子どもがこのようになるよう働きかけるためには、保育者は、この「子どもが自ら願いを形成し実現しようとする。そして成長・発達する」ということを深く捉えることが必要になる。

本研究は、この「子どもが、生き生活することにおいて、自ら願いを形成し実現しようとする。そして成長・発達する」ということを深く捉えることを目的とする。

具体的には

I 子どもは、自ら願いを形成し実現しようとする。周りの人・子ども自身が認識・評価する。嬉しさを感じたり、悲しさを感じたりする。そして、次の願いを形成していく。もちろん、実現できない場合もあるし、実現できる場合もある。だが、子どもは、このどちらの場合でも、次に、自分が充実感を感じられる願いを形成していくように思われる。では、はたして、子どもは、そうなのだろうか。

II 子どもは、願いを形成し実現しようとする→周りの人・子ども自身が(子どもの願いの形成と実現を)認識・評価する→嬉しく感じたり、悲しく感じたりする→充実感を感じられる次の願いを形成していく、というプロセスを辿るが、このプロセスはどのようなものだろうか。また、このプロセスを通してどのような成長・発達をするのだろうか。

本研究では、このプロセスを次のように分けて——このように分けて考察する根拠については前稿において詳しく述べた——考察する。

1 子どもが願いを形成し実現しようとする→周りの人・子ども自身が全体に関して「無条件的に大切な子どもである(ない)」と認識・評価する→嬉しく感じたり、悲しく感じたりする→子どもは、次に、充実感の感じられる「無条件的に大切な子どもでありたい」という願いを形成していくプロセス。

2 子どもが願いを形成し実現しようとする→周りの人・子ども自身が全体に関して「～する強く大きい子どもになった(ならなかった)」と認識・評価する→嬉しく感じたり、悲しく感じたりす

る→子どもは、次に充実感の感じられる「～する強く大きい子どもになりたい」という願いを形成していくプロセス。

3 「子どもがあるものを作る」という場面において、子どもが願いを形成し実現しようとする→周りの人・子ども自身が個々の行動に関して認識・評価する→嬉しく感じたり、悲しく感じたりする→子どもは、次に充実感の感じられる「作ることができるようになりたい」という願いを形成していくプロセス。また子どもが願いを形成し実現しようとする→周りの人・子ども自身が「作ることのできる強く大きい子どもになった(ならなかった)」と認識・評価する→嬉しく感じたり、悲しく感じたりする→子どもは、次に充実感の感じられる「作ることのできる強く大きい子どもになりたい」という願いを形成していくプロセス。

4 「子どもが人を思いやる(助ける)」という場面において、子どもが願いを形成し実現しようとする→周りの人・子ども自身が個々の行動に関して認識・評価する→嬉しく感じたり、悲しく感じたりする→子どもは、充実感の感じられる「人を助けたい」という次の願いを形成していくプロセス。また子どもが願いを形成し実現しようとする→周りの人・子ども自身が全体に関して「人を助けることのできる強く大きい子どもになった(ならなかった)」と認識・評価する→嬉しく感じたり、悲しく感じたりする→子どもは、次に充実感の感じられる「人を助けることのできる強く大きい子どもになりたい」という願いを形成していくプロセス。

これら1、2、3、4において、そのプロセスはどのようなものだろうか。また、そのプロセスを通して、どのような成長・発達をするのだろうか。

これらの研究目的のうち、前稿では、IおよびIIの1、2について考察した。本稿では——前稿の考察を踏まえつつ——IIの3およびIIの4について考察する。

3 Bにおける、「子どもがあるものを作る」という場合での、個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達と全体に関するプロセスおよび成長・発達

Bにおける——二つの場合を選んでの——個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達と全体に関するプロセスおよび成長・発達について考察することにしたい。二つの場合、すなわち「子どもがあるものを作る」という場合と「子どもが人を思いやる(助ける)」という場合のうち、まず「子どもがあるものを作る」という場合を取り上げたい。この「子どもがあるものを作る」という場合を示す具体的な例(場面)として、「子どもが空き箱でロボットを作る」という場面を取り上げ——具体的には下に述べる——この場面に即して、二つのプロセスおよび成長・発達について考察する。

1) 個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達

この場合における二つのプロセスのうち、まず、個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達について、考察する。

保育室に誰か他の子どもが作ったのであろう、牛乳パックなどの空き箱を使って作ったロボットが置いてあった。ある子どもがそれを見て「空き箱でロボットを作りたい」と思った。つまり、「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成した。保育室には他に2、3人の子どもがいる。それぞれ空き箱でロボットを作ることに集中している。この子どもは、空き箱で作ることも、またロボットを作ることも初めてである。

「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成した子どもは、その願いを実現しようとする。空き箱でロボットを作るためには、空き箱や空き箱を貼りあわせるセロテープ、さらにセロテープを切るカッターなどが必要である。子どもは、まず、空き箱やセロテープを探そうとする。幼稚園

(保育所)には空き箱を集めて保管している場所があり、子どもは、そこでロボットを作るのに適したいくつかの空き箱を探すことできた。また、セロテープやカッターも用意されており、子どもはそれらも手に入れることができた。

空き箱とセロテープを手に入れることができたので、子どもは、いざ、空き箱でロボットを作ろうとする。作ろうとするが、空き箱を使うこともロボットを作ることも初めてなので、どのようにカッターでセロテープを切ったらよいのか、またどのようにセロテープを空き箱に貼りつけていったらよいのか、分からない。いざロボットを作ろうとすると、このことに気づかされる。そこで子どもは、保育室でロボットを作っている他の子どもの一人に「教えて」と頼んでみた。

頼まれた子どもは、ロボットの胴体にする空き箱と頭・顔にする空き箱を選び、セロテープを貼りつけていった。そして、さらに先に進もうとする。他の子どもがそのように自分に代わって作ってくれる。だが、あまり嬉しさは感じられない。たしかに他の子どもが自分に代わって作ってくれるということにより、自分の望むロボットができあがる。そこで嬉しさを感じることができようと感じる。だが、それほど嬉しくはない。子どもは——これまでの経験から——他の子どもに作ってもらうのではなく、自分(の力)で作る方がより嬉しいだろうと感じる。子どもは、そこで、他の子どもに「もういい。自分で作りたい」と言う。他の子どもから空き箱を取り戻し、他の子どもが貼ったセロテープまではがしてしまう。自分から、自分で、ロボットを作ろうとする。

子どもは、頭の中に自分の作りたいロボットのイメージを思い浮かべる。そして、ロボットの胴体にする空き箱と頭や顔にする空き箱を選び、セロテープを使ってつなぎあわせようとする。子どもは、先ほど他の子どもがカッターでセロテープを切ったやり方を思い出し、それに倣ってセロテープを切る。そして、二つの空き箱の両方にセロテープがかかるようにしてセロテープを貼りつける。空き箱には四つの面があるが、その一つの面にセロテープを一本貼り、残りの三つ面にも一本ずつ貼っていった。

貼り終えて、子どもは「できた」と認識・評価する。嬉しさを感じる。他の子どもに代わってしてもらうより自分で貼りつける方がより嬉しいということを改めて感じる。

貼りつけることができたことと認識・評価したので、子どもは、次に、胴体にする空き箱に足にする空き箱をつなぎあわせようとする。そのため胴体にする空き箱を手にとって持ち上げてみる。すると、胴体にする空き箱から——空き箱の重さに貼りつけたセロテープが耐えることができず——頭・顔にする空き箱が、はがれ、下に落ちてしまった。

子どもは「とれてしまった」と認識・評価する。悲しさを感じる。このように感じる時、子どもは「貼りつけることができない。だからもうやめてしまいたい」という気持ちにおそわれる。だが、その気持ちに耐えていると、またその気持ちから「実際にやめてしまう」という行動に入ること抑制していると、「もう一度やってみようか。もう一度やってみればうまくいくかもしれない。やってみてうまくいくと嬉しいだろう」という思いが湧いてくる。この思いが湧いてきて、次第にふくらみ強いものになってくる。この時、子どもは、もう一度やってみることへと入っていく。

子どもは、貼りつけることができようになるためには、どのようにしたらよいか考えていこうとする。空き箱にセロテープがどのように貼られているか改めて調べてみる。四つの面に貼ったセロテープは、両方の空き箱にほんの少しの長さしか貼られていない。また各面に一本ずつしか貼られていない。そこで子どもは、両方の空き箱にもっと長く貼りつけるようにしたらよいのではないかと考える。また各面に一本ずつではなくもっと多く貼りつけるようにしたらよいのではないかと考える。そこで前より長くなるようセロテープを切り、両方の空き箱により長くつくように貼りつけてみる。また、各面に一本ずつではなく二本ずつ貼りつけてみる。

貼りつけてみて、胴体にする空き箱を手にとって持ち上げてみる。すると、やはり空き箱の重さ

のため、貼りつけたセロテープが少しずつはがれていき、やがて全部がはがれてしまった。子どもは「やはりできなかった」と認識・評価する。悲しいと感じる。

子どもは、この時には、もう一度そして前よりはもっと強く「やはりできなかった。だから、もうやめたい」という気持ちにおそわれる。そして、その思いから実際にやめてしまうことをするかもしれない。だがこの場合も、この思いに耐えていると、また実際にやめてしまうという行動に入ること抑制していると、「もう一度やってみたら今度こそうまくいくかもしれない。もう一度やってみてできた時にはこういうことに直面しないでできた時よりより嬉しいだろう」という思いが浮かんでくる。だが、それに対して、「もうやめたい。一度やってみてできなかったのだから、もうできないだろう。だから、もうやめたい」という思いも浮かんでくる。二つの思いが葛藤する。二つの思いが激しく葛藤する中で、「やはりもう一度やってみたい。もう一度やってみたらうまくいくかもしれない」という思いの方が強くなっていく。この時、子どもはさらにもう一度やってみることへと入っていく。

子どもは、さらにもう一度、貼りあわせることができるためには、どのようにしたらよいか考えていこうとする。セロテープを各面にもっと長く貼ったらよいのではないかとすることを思いつく。他の子どもがどのように貼っているのか見に行く。他の子どもは2本ではなく何本ものセロテープを貼りつけている。それをみて、何本も貼りつけたらよい、ということを考えだす。子どもは、各面に5、6本も貼りつける、ということをする。

子どもは、このようにしたので、もうとれることはないだろうと考える。そこで胴体にする空き箱を手にとって持ち上げてみる。さらに揺すってみる。揺すってみたが、頭、顔にする空き箱はぴったりとふっついていて離れない。子どもは「貼りつけることができた」と認識・評価する。嬉しいと感じる。その嬉しさは、最初からうまく貼りつけることができた時に感じられる嬉しさに比べてより大きい。子どもは、このように、できなかったが復元し、もう一度挑戦してできた時の喜びの方がより大きいということに改めて気づかされる。

子どもは、胴体にする空き箱と頭・顔にする空き箱を離れないようつなぎあわせることができるようになったので、続いて、胴体にする空き箱に両足にする二つの空き箱をつなぎ合わせる。さらに、ロボットの両手にする二つの空き箱をやはりつなぎあわせる。

子どもは、空き箱をセロテープでつなぎあわせロボットの形へと組み立てていくということを通して、空き箱やセロテープの性質や仕組み、さらには両者の関係などについて新たに気づいていく。つまり、知識を獲得していく。セロテープをカッターで切るということを通して、セロテープは柔らかいこと、その一面はツルツルしているが、もう一面は糊のようなものが貼ってあってベトベトしておりものにふっつくということ、カッターの刃に対して垂直に力を加えると簡単に切れること、などについて新たに気づいていく。空き箱にセロテープを貼りつけようとするを通して、空き箱の表面はツルツルしていること、セロテープの長さや本数を多くすると空き箱の重さに耐え空き箱が離れなくなること（セロテープと空き箱との関係）などについて新たに気づいていく。子どもは、それまで知らなかったこと気づく時（新たに知識を獲得していく時）、嬉しさを感じる。

子どもは、また、空き箱をセロテープでつなぎあわせロボットの形へと組み立てていくということを通して、新たに離れないよう貼りつけることができるようになる。つまり、貼りつける技能を獲得していく。空き箱をセロテープで離れてしまわないように貼りつけようとするを通して——二つの空き箱に貼るセロテープの長さを長くすると、また何本も貼ると空き箱の重さに耐えて離れることはなくなる、と新たに気づいたことを使いながら——セロテープを長く切ること、空き箱に貼る長さが長くなるように貼ること、何本も貼ること、ということをしていく。このことによって、空き箱を離れないように貼りつける技能を獲得していく。子どもは——これまで知らなかった

ことを知る時嬉しさを感じるのと同じように——これまでできなかったことができるようになる時(新しく技能を獲得していく時)、嬉しさを感じる。

子どもは、胴体にする空き箱に足や手にする空き箱をつなぎ合わせたので、つまりロボットの形に空き箱を組み立て終わったので、次に、頭・顔にする空き箱の上に目、鼻、口を描こうとする。

赤鉛筆が近くにあったので、それを手にとり、目、鼻、口を描こうとする。まず、自分がそれまでに蓄えてきたロボットのイメージを思い浮かべてみる。その目はどんな形でどんな色をしているのか、鼻はどうか、口はどうか、など。だが、子どもは、明確に思い浮かべることができない。ロボットの目、鼻、口を描こうとして、このことに気づかせられる。そこで子どもは、ロボットの目、鼻、口はどんな形をしていて、どんな色をしているのか調べようとする。家に帰り、テレビアニメを見、そこに登場するロボットの目はどうであるか、鼻はどうであるか、見ようとする。あるいは、他の子どもの作っているロボットを見に行き、その目はどうであるか、鼻はどうであるか、見ようとする。子どもは、このようにして、自分のロボットの目、鼻、口についてのイメージを明確にする。

ロボットの目、鼻、口についてのイメージを明確にしたので、それにしがたって、頭・顔にする空き箱の上に赤鉛筆で目、鼻、口を描いてみる。牛乳パックの表面はツルツルしている。そのために描きにくい。また赤鉛筆の色が薄くしかつかない。しかし、なんとか描く。描いてみて、「目、鼻、口を描くことができた」と認識・評価する。嬉しい。

しかし、そのあと見直してみると、顔全体に対して目、鼻、口が小さく、しかも真ん中にくっつきすぎて描かれていることが分かった。色も薄い。描くことができたのであるが、もう一つ嬉しくない。子どもは、このまま終えてしまうのではなく、考え、工夫して描いた方がより嬉しいだろうとを感じる。そこで子どもは、「考え、工夫して描きたい」と思う。

子どもは、赤鉛筆では色がうまくつかず薄くしか描けないので、太目のサインペンを使ってみようとする。太目のサインペンを探してきて、より大きく、またくっつき過ぎないように間隔をあけて描く。描くことができ、「できた」と認識・評価する。嬉しい、と感じる。その嬉しさは、考え、工夫しない場合の嬉しさに比べて大きい。子どもは、考え、工夫してできた場合の方がより嬉しいということに気づかせられる。

子どもは、最初、「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成した。そして、それを実現しようとした。それを実現しようとして、いろいろなことをし、その最後として頭・顔にする空き箱に目、鼻、口を工夫して描くことをした。したがって、子どもが「(工夫して)描くことができた」と認識・評価する時、子どもは同時に、「とうとう空き箱でロボットを作ることができた」と認識・評価する。つまり、「願いを最終的に実現できた」と認識・評価する。そして、このように、認識・評価する時、子どもは、大きな嬉しさ(充実感)を感じる。

子どもは、次の願いを形成していこう。

子どもは、ここで、最終的には、願いを實現でき、ロボットを作ることができた。そして大きな喜び(充実感)を味わった。そこで子どもは、この嬉しさ(充実感)が感じられるだろう次の願いを形成していこう。子どもは、次に、「空き箱でロボットをもう一度作りたい。作ることができるようになりたい」という願いを形成するかもしれない。あるいは「空き箱でロボットをもっと上手に作りたい。作ることができるようになりたい」という願いを形成するかもしれない¹⁾。

そして、子どもは——こうした願いを形成したら——それを実現していこうとするだろう。

「子どもがあるものを作る」という場合における、個々の行動に関するプロセスについて述べてきたが、では、このプロセス、さらには次のプロセスを通して、子どもはどのような成長・発達を

するのだろうか。

だが、この点の考察に入る前に——少し横道に逸れるかもしれないが——次のことを考察したい。

一口に成長・発達といっても、いろいろな成長・発達がある。どのような立場から捉えられるかによって、またどのように捉えられるかによって、そこで捉えられる成長・発達は異なってくる。筆者は、成長・発達の捉え方は大きく二つに分けることができると考える。

一つは、子どもの立場から、子ども自身がそのような自分になろうとする成長・発達である。後に詳しく述べるが、全体に関するプロセスにおいて、子どもは「～する強く大きい子どもになりたい」という願いを形成し実現しようとする。この時子どもは、自分から、自分のなりたい自分（あるいはそのように成長・発達したい自分）を捉え、そして自分からそういう自分になろう（成長・発達しよう）とする、といえる。こういう子どもの立場から、子ども自身が自分になろうとする成長・発達である。ただ、こうした成長・発達は、個々の行動に関するプロセスではなされない。全体に関するプロセスにおいてのみなされる。

もう一つは、発達研究者、保育者などが、それぞれの理論的枠組みでもって捉える成長・発達である。これには、ピアジェの発達の捉え方、田中昌人の発達の捉え方、エリクソンの発達の捉え方など多くの捉え方がある。また、「主体性」とか「考え、工夫すること」とかといった観点から分析し、子どもは、「主体性において成長・発達する」「考え、工夫することにおいて成長・発達する」と捉える捉え方もある。

本稿では、以下、個々の行動に関するプロセスにおける、また全体に関するプロセスにおける成長・発達を、まず、子どもの立場から子ども自身がなろうとする成長・発達において捉えることを試みたい。次に、発達研究者や保育者などが捉える捉え方のうち、「主体性において成長・発達する」「考え、工夫することにおいて成長・発達する」……と捉える捉え方で捉えたい。

さて、ここで元に戻ろう。この「子どもがあるものを作る」という場面における個々の行動に関する認識・評価のプロセスにおいて、子どもはどのような成長・発達をするのだろうか。

まず前者、すなわち、「子どもの立場から子ども自身がなろうとする成長・発達」という捉え方からすると、どうであろうか。ただ、「子どもの立場から子ども自身がなろうとする成長・発達」は、既に述べたように、全体に関するプロセスにおいてのみなされる。今考察しようとしているプロセスは個々の行動に関わるプロセスである。それゆえ、このプロセスにおいては、この成長・発達はなされない。

次に、後者、すなわち、「主体性において成長・発達する」といった捉え方からすると、どうであろうか。子どもは、この個々の行動に関するプロセス——さらに次のプロセスを通して——次のような成長・発達をする。

①子どもは、空き箱、セロテープなどについての知識や空き箱を離れないよう貼りつけていく技能において成長・発達する（知識や技能において成長・発達する）。

子どもが、例えば、あるものを作りたい、という願いを形成し実現しようとする。子どもは、その過程で、材料、用具などについて新たに知っていく。つまり、知識において成長・発達していく。それまで知らなかったことを新たに知ると、嬉しい。子どもは、新たに知ることが嬉しい、ということに気づいていく。また子どもは、その過程で、それまでできなかったことができるようになる。つまり、技能において成長・発達していく。それまでできなかったことができるようになる、嬉しい。子どもは、新たにできるようになることが嬉しい、ということに気づいていく。そこで子どもは、次に、あるものを作りたいと思う時、そして実際に作ろうとする時、その中で「新たに知りたい」、「新たにできるようになりたい」という願いを形成していくようになる。

この「子どもが空き箱でロボットを作る」という場面においても、子どもは、セロテープをカッターで切り空き箱に貼りつけていくということを通して、セロテープは柔らかいこと、空き箱の表面はツルツルしていること、セロテープの長さや貼る本数を多くすると空き箱が離れなくなることなどについて——「セロテープはこんなに柔らかいのだ」「このようにセロテープを長くし沢山貼ると空き箱が離れなくなるのだ」というように、その気づきを明確に意識する場合も多い——新たに気づいている。つまり、知識において成長・発達している。子どもは、新たに気づく時、嬉しい。子どもは、新たに気づくこと(知ることが)が嬉しい、ということに改めて気づかされる。

子どもは、また、空き箱が離れないよう貼りつけようとするを通して、セロテープを長く切る、空き箱に貼る長さが長くなるように貼る、何本も貼る、ということをしていく。子どもは、このことを通して、空き箱を離れないように貼りつけることができるようになる。つまり、空き箱を離れないように貼りつける技能において成長・発達している。子どもは、新たにできるようになった時、嬉しい。子どもは、新たにできるようになることが嬉しい、ということに改めて気づかされる。

子どもは、この「空き箱でロボットを作る」という場面において、新しく知ることが嬉しいこと、新しくできるようになることが嬉しいことを、改めて実感する。子どもは、この「空き箱でロボットを作りたい」という願いを実現したあと、次の願いとして「もう一度ロボットを作りたい」という願いを形成するかもしれない。その時子どもは、その中で、「(空き箱やセロテープなどについて)新しく知りたい」、「(空き箱を離れないように貼りつけることにおいて)新しくできるようになりたい」という願いを形成し、実現していくということになるだろう。したがって子どもは、子どもが次に形成し実現する願いにおいても、知識や技能において成長・発達するのである。

②子どもは、自分から、自分の力で～しようとするということにおいて成長・発達する(自発性、自立性、主体性において成長・発達する)。

子どもは、それをするのに必要な力が伸びるのに伴い、親、保育者にしてもらっていたことを、自分の力でしようとするようになる。それまでは親、保育者から食べさせてもらっていた。だが、自分でスプーンをもって自分で食べようとする。それまでは親、保育者から服を着せてもらっていた。だが、自分の力で服を着ようとする。親、保育者にしてもらおうと、たしかに、自分の望む、食べ物を食べることを手に入れることができる。自分の望むことを手に入れることができるので、嬉しい。だが、自分の力でやってみると、自分の力で食べ物を食べることを、自分の力で服を着ることの嬉しさを得ることができ、その喜びの方がより大きいことを知る。そこで子どもは、あることをしようとする時、親、保育者にやってもらおうのではなく、自分の力でやりたいと思う。つまり、「自分の力で、～したい」という願いを形成するようになる。

関連して、子どもは、あることをする時、親、保育者からさせられてするより、自分からした方がより嬉しい、ということを知る。親、保育者からさせられてする場合と、自分からする場合とは——同じことをし、同じ結果が得られたとしても——自分からする場合の方がはるかに嬉しい。そこで子どもは、あることをしようとする時、自分からやりたいと思う。つまり、「自分から～したい」という願いを形成するようになる。

この「子どもが空き箱でロボットを作る」という場面において、子どもは、セロテープをどのように貼ったらよいのか分からない。そこで他の子どもに頼んでいる。頼まれた子どもは、子どもに代わってセロテープを貼ってやる。だが、子どもは——たしかに、セロテープを離れないように貼るという結果を手に入れることはできるのだが——あまり嬉しくない。子どもは、自分の力で貼った方がより嬉しいだろうと感じる。そこで子どもは、他の子どもにってもらおうことをやめる。自分の力で貼りたいと思う。つまり、「自分の力でセロテープを貼りたい」という願いを形成していく。

そして、子どもは、その願いを実現しようとする。他の子どもの力によってではなく、自分の力でセロテープを貼りつけようとする。そしてでき、喜ぶ。子どもは、自分の力で～することにおいて成長・発達する。

子どもは、この「空き箱でロボットを作る」という場面において、自分から、自分の力で、セロテープを離れないよう貼ることができるようになることの喜びの方がより大きいということを改めて実感する。子どもは、次の願いとして「もう一度ロボットを作りたい」という願いを形成するかもしれない。子どもは、自分から自分の力で～した方がより嬉しいということを改めて実感している。それゆえ子どもは、「もう一度ロボットを作りたい」という願いを形成していくさい、喜び(充実感)の感じられる「自分から、自分の力で、もう一度ロボットを作りたい」という願いを形成していくことになるだろう。したがって子どもは、子どもが次に形成し実現する願いにおいても、「自分から、自分の力で～する」ということにおいて成長・発達するのである。

③子どもは、考え、工夫して～しようとすることにおいて成長・発達する(考える力、工夫する力において成長・発達する)

子どもは、あることをして、できたと認識・評価する。そうすると嬉しい。しかしそれで終わってしまうのではなく、次に考え、工夫してみる。考え、工夫して、できると嬉しい。この嬉しさは、考え、工夫しない場合の嬉しさに比べると、より嬉しい。そこで子どもは、あることをしようとする時、できたらそれで終わりとするのではなく、次に、考え、工夫して～してみようとする。つまり、「考え、工夫して～したい」という願いを形成するようになる。

この「子どもが空き箱でロボットを作る」という場面において、子どもは、目、鼻、口を赤鉛筆で描こうとする。そして描くことができ、嬉しさを感じる。だが子どもは——それまでの経験から——工夫して描いた方がより嬉しいだろう、と感じる。そこで子どもは、そこで終えてしまうのではなく「考え、工夫して描きたい」と思う。つまり、「考え、工夫して描きたい」という願いを形成していく。子どもは、この願いを実現しようとする。太目のサインペンを使って目、口、鼻をより大きく、より間隔をあけて描く。描くことができ嬉しいと感じる。子どもは、考え、工夫することにおいて成長・発達する。

この「子どもが空き箱でロボットを作る」という場面において、子どもは、次の願いとして、「もう一度ロボットを作りたい」という願いを形成するかもしれない。そのさい子どもは——考え、工夫して～した方がより嬉しさを感じられるということを実感しているので——喜び(充実感)の感じられる「考え、工夫して、もう一度ロボットを作りたい」という願いを形成していくことになるだろう。子どもは、子どもが次に形成し実現する願いにおいても、考え、工夫することにおいて成長・発達するのである。

④子どもは、できなかつたとしても、立ち直り、もう一度挑戦しようとすることにおいて成長・発達する(立ち直る力、もう一度挑戦しようとする力において成長・発達する)

子どもが、あることをしようとする。しかし、できない、ということも多い。子どもは、その時悲しさを感じる。そしてそれを「もうやめたい」と思う。だが、その気持ちに耐え、立ち直り、もう一度挑戦しようとする。そしてできると、嬉しさを感じる。その時の嬉しさは、立ち直りもう一度挑戦せずにただできた時の嬉しさに比べてより大きい。そこで子どもは、あることをしようとするができないということに直面した場合、立ち直ってもう一度挑戦したい、と思う。つまり、「立ち直り、もう一度挑戦して～できるようになりたい」という願いを形成する。

この「子どもが空き箱でロボットを作る」という場合において、子どもは、セロテープで空き箱をつなぎ合わせようとする。だが、離れないよう貼りつけることができない。子どもは、「もうやめたい」という気持ちに襲われる。だがその気持ちに耐えていると、「もう一度やってみようか。

もう一度やってみるとうまくいくかもしれない」という思いが湧いてくる。つまり、「立ち直り、もう一度挑戦したい」という願いが形成されてくる。子どもは、この願いを実現しようとする。二度目の挑戦によって、とうとう離れないよう貼りつけることができるようになる。子どもは、立ち直り、もう一度挑戦することにおいて成長・発達する。

この「子どもが空き箱でロボットを作りたい」という場面において、子どもは、次の願いとして「もう一度ロボットを作りたい」という願いを形成するかもしれない。そしてそこにおいて、できないという事態に直面するかもしれない。そのさい、子どもは——立ち直り挑戦してできた方がより嬉しさを感じられるということを実感しているの——喜び(充実感)の感じられる「立ち直り、挑戦して～できるようになりたい」という願いを形成していくことになるだろう。それゆえ子どもは、子どもが次に形成し実現する願いにおいても、立ち直り、挑戦するということにおいて成長・発達するのである。

「子どもがあるものを作る」という場合における、個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達について考察した。そこで次に、この場合におけるもう一つのプロセス、すなわち、全体に関するプロセスおよび成長・発達について考察したい。

2) 全体に関する「作ることができる強く大きい自分になった」と認識・評価するプロセスおよび成長・発達

個々の行動に関する認識・評価のプロセスおよび成長・発達についての考察においては、子どもが「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成し実現する、周りの人・子ども自身がそのことを認識・評価する、という場面を取り上げ、その場面に即して考察した。この全体に関するプロセスおよび成長・発達についての考察においても、同じ、子どもが「空き箱でロボットを作る」という願いを形成し実現する、周りの人・子ども自身がそのことを認識・評価する、という場面を取り上げ、その場面に即して、考察を進めたい。

ただ、同じ、子どもが「空き箱でロボットを作る」という願いを形成し実現する、周りの人・子ども自身がそのことを認識・評価する、という場面を取り上げるといっても、個々の行動に関するプロセスとは、少し異ならざるを得ない。個々の行動に関するプロセスについての考察においては、子どもが「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成し実現しようとする、周りの人・子ども自身がその個々の行動に関して、つまり、「空き箱でロボットを作ることができた」ということに関して認識・評価するという場面を取り上げ、それに即して考察した。だが、この全体に関するプロセスについての考察においては、子どもが「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成し実現しようとする、周りの人・子ども自身が——個々の行動に関して認識・評価するのではなく——全体に関して認識・評価するという場面を、取り上げることが必要になる。それゆえ、取り上げる場面は、次のようになる。

子どもが——保育室に誰か他の子どもが作ったのであろう、牛乳パックなどの空き箱を使って作ったロボットがおいてあったのを見て——「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成した。子どもは、願いを実現しようとする。——以下これら子どもが願いを実現していく場面は、個々の行動に関するプロセスについての考察において述べた場面と同じである。それゆえ詳述せず簡単に述べるにとどめたい——子どもは、まず空き箱やセロテープを探そうとする。探すことができたなら、空き箱をロボットの形に組み立てようとする。だが子どもは初めてなのでどのようにしたらよいか分からない。他の子どもの一人に「教えて」と頼んでみる。頼まれた子どもは、空き箱にセロテープを貼ってくれる。だが、あまり嬉しくはない。そこで子どもは、自分(の力)で、空き箱にセロテープを貼りつけようとする。だがうまく貼り付けることができない。二度挑戦して、

ようやく離れないよう貼りつけることができた。貼りつけることができたので、頭・顔にする空き箱に目、鼻、口を描こうとする。なんとか描くことができた。だが、さらに工夫して描こうとする。そして子どもは、とうとう、空き箱でロボットを作ることができた。「空き箱でロボットを作ることができた」と認識・評価する。このように認識・評価すると、非常に嬉しい。

この時、子どもが空き箱でロボットを作る様子をずっと見ていたある他の子どもが、「〇〇は、空き箱でロボットを作ることのできる強く大きい子どもになった」と言った。つまり、「空き箱でロボットを作ることのできる強く大きい子どもになった」と認識・評価した。子どもは、このように認識・評価されると、嬉しい。子どもは、周りの子どもの認識・評価を受けて、自分自身によっても、「空き箱でロボットを作ることのできる強く大きい子どもになった」と認識・評価する。子どもは、嬉しい。

子どもは、ここで、「空き箱でロボットを作ることのできる強く大きい子どもになった、嬉しい」という喜びを味わった。子どもは、この喜びが味わえるだろう次の願いを形成していこう。子どもは、「ロボットをもう一度作ることのできる強く大きい子どもになりたい」という願いを形成していかかもしれない。あるいは「ロボットをもっと上手に作ることのできる強く大きい子どもになりたい」という願いを形成していかかもしれない。

そして子どもは、こうした願いを形成したら、それを実現していこうとするだろう。

子どもが「あるものを作る」という場面における、全体に関するプロセスは、このようである。では、このプロセス、さらには次のプロセスを通して、子どもは、どのような成長・発達をするのだろうか。

まず、子どもの立場から、子ども自身がそのような自分になろうとする成長・発達において捉えると、どうであろうか。

この全体に関するプロセスでは、子どもは、最初「空き箱でロボットを作りたい」という願いを形成し、それを実現した。周りの子どもが、そしてそれを受けて子ども自身が、「空き箱でロボットを作ることのできる強く大きい子どもになったのだ」と認識・評価する。子どもは、ここで、「空き箱でロボットを作ることのできる強く大きい子どもになった」という喜びを味わったのであるから、その喜びが味わえるだろう次の願いを、例えば「ロボットをもう一度作ることのできる強く大きい子どもになりたい」という願いを形成していく。そして、それを自分から実現していこうとする。

子どもは、この「ロボットをもう一度作ることのできる強く大きい子どもになりたい」という願いを形成し実現していくことを通して、自分のなりたい(そのように成長・発達したい)自分を捉え、自分から、そのような自分になろう(成長・発達しよう)とし、そして自分のなりたかった自分になる(成長・発達する)のだ、ということが出来る²⁾。

次に、「主体性において成長・発達する」「考え、工夫することにおいて成長・発達する」といった捉え方から捉えると、どうであろうか。

この全体に関するプロセスは、個々の行動に関するプロセスとほぼ同じである。最初他の子どもにセロテープを貼ってもらうことをしたが、自分の力でセロテープを貼ろうとする。うまくいかなかったが、立ち直り挑戦しようとする。目、鼻、口を描くが、さらに考え工夫して描こうとする。……。ただ、個々の行動に関するプロセスでは「ロボットを作ることができた」と認識・評価する、一方全体に関するプロセスでは「ロボットを作ることのできる強く大きい子どもになった」と認識・評価する。この点では異なっている。だが、この点を除いて、そのプロセスはほぼ同じである。それゆえ、この全体に関するプロセスにおいても、個々の行動に関するプロセスと同じ成

長・発達がなされるということが出来る。

すなわち、

- ①空き箱、セロテープなどについての知識や空き箱を離れないよう貼りつけていく技能において成長・発達する。
- ②自分から、自分の力で～しようとするにおいて成長・発達する。
- ③考え、工夫して～しようとするにおいて成長・発達する。
- ④できなかったとしても、立ち直り、もう一度挑戦して～しようとするにおいて成長・発達する。

これらの成長・発達については、個々の行動に関するプロセスにおける成長・発達について述べたさい詳述した。それゆえ、ここで改めて述べることはしない。

4 Bにおける、子どもが「人を思いやる(助ける)」という場面での、個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達と全体に関するプロセスおよび成長・発達

「子どもがあるものを作る」という場合における考察を行ったので、次に「子どもが人を思いやる(助ける)」という場合における考察を行いたい。「子どもが人を思いやる(助ける)」という場合を示す具体的な例(場面)として、「年下の子どもが空き箱にセロテープを貼りつけることができずに困っているのを見て、年下の子どもを思いやり、助けてやろうとする」という場面を取り上げ——具体的には下に述べる——その場面に即して、二つのプロセスおよび成長・発達について、考察していきたい。

二つのプロセスおよび成長・発達のうち、まず、個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達について考察する。

1) 個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達

子どもが空き箱でロボットを作っていた。保育室には、他に何人かの子どもがおり、やはり空き箱でロボットを作っている。その中の一人、少し年下の子どもが、空き箱にセロテープを貼りつけている。セロテープを貼り終え、頭・顔にする空き箱を手にとって持ち上げた。すると、空き箱の重さのため貼りつけたセロテープがはがれ、胴体にする空き箱が離れ落ちてしまった。その年下の子どもは、もう一度セロテープを貼り直す。今度はセロテープの貼る長さを長くしてみる。だが、やはり、空き箱が離れ落ちてしまった。

子どもは、その年下の子どもの様子を見ていた。そして、「空き箱にセロテープを貼りつけることができないで困っている」と理解した。子どもは、過去何回か他の人が困っている時助けることをし、そして他の人が喜ぶとそれが自分にとっても嬉しいということを経験している。子どもは、年下の子どもが今困っている、助けるならば、その子どもは困ったことから抜け出せ、空き箱でロボットを作りたいという願いを実現することができ喜ぶだろう、そして、その喜ぶことが自分にとっても喜びになるだろう、と感じる。そこで子どもは、その子どもを助けようと思った。つまり、「その年下の子どもを助きたい」という願いを形成した。

子どもは、その子どもに対して「空き箱をセロテープで貼りつけることができないので困っているのだね。助けようか」と言った。その年下の子どもは「うん」といった。そこでさっそく、その子どもの所に行き、その子どもの空き箱にセロテープを貼りつけることを始めた。貼りつけることは何度か行っているのだから、空き箱が離れないように貼りつけることができる。頭・顔にする空き箱と胴体にする空き箱を貼りつけ、さらに足にする空き箱を貼りつけようとした。だが、年下の子どもは喜ばない。むしろ、「いや、自分でする」と言って、子どもが貼りつけているその空き箱をとっ

てしまう。

子どもは、自分が助けたのだから、年下の子どもは喜ぶだろうと思っていた。だが、そうではなかった。子どもは落ち込んでしまう。助けることをもうやめてしまいたいと思う。だが、この気持ちに耐えていると、「もう一度助けようか、もう一度助けることをしたらうまくいくかもしれない」という思いがでてくる。この思いが次第にふくらみ、強いものになっていく。この時子どもは、もう一度助けることへと入っていく。

だが、子どもは、どのように助けたらよいのか分からない。子どもは、その子どもがなぜ喜ばなかったのか考えようとする。そのなかで、その子どもが「いや、自分です」と言ったことを思い出す。その子どもは、空き箱をセロテープで貼りつけることができないで困っていた。そして助けてほしいと思っていた。だが、それは、誰かから貼りつけてもらうことを求めているのではない。そうではなく、自分の力で貼るつけることができるようになる、そのことを助けることを求めているのだ、ということに気づいた。

この点に気づいて、子どもは、どのように助けたらよいのか考えてみようとする。子どもは、まず自分がセロテープを貼ってみせる。つまり、モデルを示す。そのあと、年下の子どもがそのモデルに倣ってセロテープを貼ってみることをする。このようにしたらよいのではないかということを考えだす。

そこで子どもは、セロテープを長く切り、そして両方の空き箱に同じ長さにつくよう貼りつけて見せる。そしてそのあと年下の子どもに実際に貼ってもらうことをする。

子どものこうした助けによって、年下の子どもは、自分の力で、頭・顔にする空き箱と胴体にする空き箱をセロテープでしっかりと貼りつけることができるようになった。「できた」と認識・評価すると嬉しい。年下の子どもは、足にする空き箱や手にする空き箱を貼りつけることへと進み、さらに頭・顔にする空き箱に目、鼻、口を描くことへと進む。

年下の子どもは、目、鼻、口を描きこむことができた。描きこむことができたことと認識・評価する時、同時に「とうとう空き箱でロボットを作ることができた」と認識・評価する。年下の子どもは——「空き箱でロボットを作りたい」という願いを実現することができたことと認識・評価したのであるから——大きな嬉しさを感じる。

その時、子どもは、その年下の子どもの喜ぶことが嬉しい。自分にとっても嬉しい。子どもは、同じように、大きな喜びを感じる。

子どもは、ここで、他の人が困っていることを助け、その人が願いを実現することができて喜ぶ、そのことが自分にとっても嬉しい、自分にとっての喜びとなる、ということに改めて味わった。子どもは、その喜びの感じられるだろう次の願いを形成していこう。子どもは、「他の人がその願いを実現できず困っているという場面」に出会った時、「(その人の願いが実現できるように)助けたい」という願いを形成していこうになるだろう。

そして、子どもは——こうした願いを形成したら——それを実現していこうとするだろう。

以上、「子どもが人を思いやる(助ける)」という場面における個々の行動に関するプロセスについて考察したが、では、子どもは、このプロセスさらには次のプロセスを通して、どのような成長・発達をするのだろうか。

まず、子どもの立場から子ども自身がそのようになろうとする成長・発達という捉え方から捉えると、どうであろうか。この「子どもの立場から子ども自身がそのようになろうとする成長・発達」は、既に述べたように、全体に関するプロセスにおいてのみなされる。今考察しているプロセスは個々の行動に関するプロセスである。それゆえこのプロセスにおいては、この成長・発達はなされ

ない。

次に、「主体性において成長・発達する」、「考え、工夫することにおいて成長・発達する」といった捉え方から捉えると、どうであろうか。

①子どもは、年下の子どもの気持ちなどについての知識や年下の子どもが自分の力で貼りつけることができるようになるよう助けるといった技能において、成長・発達する(知識や技能において成長・発達する)。

子どもが、例えば、ある子どもを助けたい、という願いを形成し実現しようとする。子どもは、その過程で、その子どもの気持ちなどについて新たに知っていく。それまで知らなかったことを知ると嬉しい。子どもは、新たに知ることが嬉しい、ということに気づいていく。また子どもは、その過程で、新たに助けられることができるようになる。それまで助けられなかったことができるようになることが嬉しい。子どもは、新たに助けられることができるようになることが嬉しい、ということに気づいていく。

この「子どもが年下の子どもを助ける」という場面においても、子どもは、年下の子どもの気持ちに新たに気づく(知る)、ということをしている。最初子どもは、「年下の子どもは——セロテープを貼りつけることができない、そのため——貼りつけることをしてほしいと思っている」と理解した。それゆえ、セロテープを貼りつけることをしてやる。だが、年下の子どもから拒否される。そこで年下の子どもの気持ちを考えてようとする。そして年下の子どもが本当は、「自分の力でセロテープを貼りつけることができるようになりたい。そのようになるよう助けてほしい」という気持ちをもっていることに改めて気づく。子どもは、ここにおいて、年下の子どもの本当の気持ちを知る(知識)ということにおいて成長・発達する。

この「年下の子どもを助ける」という場面において、子どもはまた——年下の子どもの本当の気持ちに気づくことにより——年下の子どもが自分の力で貼りつけることができるよう助けるためにどのようにしたらよいか考えようとする。そして、考えだし、まず自分がセロテープを貼ってみせモデルを示し、そのあと年下の子どもがそのモデルに倣ってセロテープを貼ってみることをする、という助け方をする。年下の子どもは、この助けを通して、自分の力で貼りつけることができるようになる。子どもは、ここにおいて、年下の子どもが自分の力で貼りつけることができるよう助けるといった技能において成長・発達する。

子どもは、この「年下の子どもを助ける」という場面において、新しく知ることが嬉しいということ、新しく助けられることができるようになることが嬉しいということ、改めて実感する。子どもは、このあと、他の子どもが願いを実現できず困っているという場面に出会った時、「その子ども助けたい」という願いを形成するかもしれない。その時子どもは、その中に、「(子どもの気持ちなどについて)新しく知りたい、(子どもの気持ちを理解して助けることにおいて)新しく助けられることができようになりたい」という願いを形成し実現していくことになるだろう。子どもは、子どもが次に形成し実現する願いにおいても、知識、技能において成長・発達するのである³⁾。

②子どもは、自分から、自分の力で~しようとするということにおいて成長・発達する(自発性、自主性、主体性において成長・発達する)。

先述したが、子どもは、親、保育者にしてもらっていたことを自分の力でしようとするようになる。そして、自分の力で試してみ、自分の力でできた方がはるかに嬉しい、ということを知る。子どもは、あることをしようとする時、やってもらうのではなく、自分の力でしたい、と思うようになる。関連して子どもは、親、保育者からさせられてするより、自分からする方が嬉しい、ということを知る。そこで子どもは、あることをしようとする時、やはり、自分からしたい、と思うようになる。

この「子どもが年下の子どもを助ける」という場面においても——子どもは、それまでの経験から、自分から自分の力で助けた方が嬉しいということを実感しているの——自分から、そして自分の力で、年下の子どもを助けようとする。最初、年下の子どもに拒否され、自分から自分の力で助けることができなかつた。だが最終的には、自分から自分の力で助けることができた。それゆえ子どもは、ここにおいて、自分から、自分の力ですることにおいて成長・発達する。

③子どもは、考え、工夫することにおいて成長・発達する(考える力、工夫する力において成長・発達する)

子どもが、あることをしたが、できなかつた。だがもう一度、今度はやり方をいろいろ考え、工夫してやってみる。そしてできる。そうすると嬉しい。この嬉しさは、考え工夫しなかつた場合の嬉しさに比べて大きい。そこで子どもは、「考え、工夫して～することができるようになりたい」という願いを形成する。

この「年下の子どもを助ける」という場面において、子どもは、年下の子どもを助けようとする。だが、年下の子どもから拒否される。子どもは、その中で、年下の子どもが「自分の力で貼りつけることができるように助けてほしい」と思っていることに気づく。子どもは、年下の子どもが自分の力で貼りつけることができるような助け方を、考え、工夫しようとする。考え出し、そしてそれを実際にやってみて助けることができた。子どもは、考え、工夫することにおいて、成長・発達する。

④子どもは、できなかつたとしても、立ち直り、もう一度挑戦しようとするにおいて成長・発達する(立ち直る力、もう一度挑戦しようとする力において成長・発達する)

子どもがあることをしようとする。だができなかつた。しかし、それでやめてしまうのではなく、立ち直りもう一度挑戦しようとする。そして、できると嬉しい。その嬉しさは、立ち直りもう一度挑戦せずにできた時の嬉しさに比べてより大きい。そこで子どもは、あることをしようとするができないという事態に直面した時、「立ち直ってもう一度挑戦して～することができるようになりたい」という願いを形成する。

この「年下の子どもを助ける」という場面において、子どもは、年下の子どもを助けようとする。だが、拒否される、という事態に直面する。「もう助けることをやめてしまいたい」という思いに襲われる。しかしその一方、「もう一度やってみようか。もう一度やってみて助けることができる」とより嬉しいだろう」という思いも湧いてくる。そこで子どもは、立ち直り挑戦する。そして、助けることができる。子どもは、立ち直り、挑戦することにおいて成長・発達する。

「子どもが人を思いやる(助ける)」という場面における、個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達について考察した。この場面におけるもう一つのプロセス、すなわち全体に関するプロセス及び成長・発達はどうであろうか。

2) 全体に関する「人を助ける強く大きい子どもになった」と認識・評価するプロセスおよび成長・発達

「子どもが人を思いやる(助ける)」という場合における、この全体に関するプロセスおよび成長・発達についての考察においても、個々の行動に関するプロセスについての考察の場合と同じ、子どもが「年下の子どもを助けたい」という願いを形成し、実現する。周りの人・子ども自身がこのことを認識・評価する、という場面を取り上げ、その場面に即して考察したい。ただ、この全体に関するプロセスおよび成長・発達についての考察においては、子どもの願いの形成と実現を、周りの人・子ども自身が個々の行動に関して認識・評価するのではなく、全体に関して認識・評価するという場面を取り上げることが必要になる。

子どもが——年下の子どもが空き箱にセロテープをうまく貼りつけることができないで困っているのを見て——その年下の子どもを助けたい」という願いを形成した。子どもは願いを実現しようとする。……(以下、この子どもが願いを実現していく場面は、個々に行動に関するプロセスについての考察において述べた場面と同じである。重複することになるので、この場面について述べることは省略したい。)

子どもが、年下の子どもが自分の力でセロテープを貼りつけることができるよう助けたことにより、年下の子どもは、とうとう空き箱でロボットを作ることができた。年下の子どもは、「空き箱でロボットを作りたい」という願いを実現することができたので、大きな喜びを感じる。

その時、子どもは、その年下の子どもの喜ぶことが嬉しい。その年下の子どもの喜ぶことが自分にとっての喜びになる。子どもは、大きな喜びを感じる。

この時、子どもが年下の子どもを助ける様子をずっと見ていたある他の子どもが「〇〇は、人を助ける強く大きい子どもになった」と言った。つまり、「〇〇は、人を助ける強く大きい子どもになった」と認識・評価した。子どもは、このように認識・評価されると、嬉しい。子どもは、他の子どものその認識・評価を受けて、自分自身によっても、「人を助ける強く大きい子どもになった」と認識・評価する。嬉しさを感じる。

子どもは、ここで、「人を助ける強く大きい子どもになった」そのことが嬉しいという喜びを改めて味わった。子どもはこの喜びが味わえるだろう次の願いを形成していくだろう。「人がその願いを実現しようとするができないで困っている」という場面に出会った時、子どもは「人を助ける強く大きい子どもになりたい」という願いを形成していくだろう。

そして、子どもは——こうした願いを形成したならば——それを実現していこうとするだろう⁴⁾。

「子どもが人を思いやる(助ける)」という場面における全体に関するプロセスは、このようである。では、このプロセス、さらに次のプロセスを通して、子どもは、どのような成長・発達をするのだろうか。

まず、子どもの立場から子ども自身がなろうとする成長・発達において捉えると、どうであろうか。

この全体に関するプロセスでは、子どもは、最初「年下の子どもを助けたい」という願いを形成し、それを実現した。周りの人が、そしてそれを受けて子ども自身が、「人を助ける強く大きい子どもになった」と認識・評価する。子どもは、ここで、「人を助ける強く大きい子どもになった」という喜びを味わったのであるから、人が困っているという場面に出会った時、その喜びが味わえるだろう「人を助ける強く大きい子どもになりたい」という願いを形成し、そして、それを自分から実現していこうとする。

子どもは、この「人を助ける強く大きい子どもになりたい」という願いを形成し実現することを通して——自分のなりたい(そのように成長・発達したい)自分を捉え、そして、自分からそのような自分になろう(成長・発達しよう)とし、そして自分のなりたかった自分へと成長・発達する、ということができる。

さらに、「主体性において成長・発達する」……といった捉え方から捉えると、どうであろうか。

この全体に関するプロセスは、個々の行動に関するプロセスとほぼ同じである。ただ、たしかに、この全体に関するプロセスでは、子どもの「人を助けたい」という願いの形成と実現を、個々の行動に関してではなく、全体に関して「助けることのできる強く大きい子どもになった」と認識・評価する。この点では異なっている。だがこの点を除いて、そのプロセスはほぼ同じである。それゆえ、この全体に関するプロセスにおいても、個々の行動に関するプロセスと同じ成長・発達がな

されるということが出来る。

すなわち、

- ①年下の子どもの気持ちなどについての知識や年下の子どもが自分の力で貼りつけることができるよう助けるといった技能において成長・発達する。
- ②自分から、自分の力で～しようとする事において成長・発達する。
- ③考え、工夫して～しようとする事において成長・発達する。
- ④できなかったとしても、立ち直り挑戦して～しようとする事において成長・発達する⁵⁾。

これらの成長・発達については、個々の行動に関するプロセスおよび成長・発達について述べたさい、詳述した。それゆえ、ここで改めて述べることはしない。

註

1)子どもが「空き箱でロボットを作ることができた」と認識・評価し、嬉しさを感じる時、もし子どもがそこで、「ようやく作ることができた。精一杯努力してなんとか作ることができた」と認識・評価している場合には、子どもは、次には——「空き箱でロボットをもっと上手に作ることができるようになりたい」という願いではなく——「空き箱でロボットを(とにかく)もう一度作りたい、もう一度作ることができるようになりたい」という願いを形成していこう。

それに対して、もし子どもがそこで、「空き箱でロボットを作るとは十分できた」と認識・評価している場合には、子どもは、次には——「空き箱でロボットを(とにかく)もう一度作りたい、もう一度作ることができるようになりたい」という願いではなく——「空き箱でロボットをもっと上手に作ることができるようになりたい」という願いを形成していこう。

さらに——ここにあげた例の場合は子どもが空き箱でロボットを初めて作るという場合であるのでこういうことは起こりえないのであるが——もし子どもが空き箱でロボットをもっと上手に作るということも既に何度も行っているという場合なら、「空き箱でロボットをもっと上手に作ることはもう十分にできた」と認識・評価するという場合もある。子どもがもしこのように認識・評価する場合には、子どもは、次には——「空き箱でロボットをもっと上手に作ることができるようになりたい」という願いではなく——「(空き箱ではない)何か別のものでもロボットを作ることができるようになりたい」といった願い、あるいは「空き箱で(ロボットではない)何か別のものを作ることができるようになりたい」といった願いを形成していき、ということも考えられる。

2)子どもは、5、6歳になると、その「なりたい自分」というものをより明確に捉えていくようになる。「空き箱でロボットをもう一度作ることが出来る強く大きい子ども」という姿を具体的にイメージする。あるいは「空き箱でロボットをもう一度作ることが出来る強く大きい子どもになりたい」と言葉において捉える。このように、自分のなりたい自分をより明確に捉えていくようになる。

そして子どもは、5、6歳になると、それだけではなく、その「なりたい自分」を何日間にもわたって粘り強く持続的に実現していこうとするようになる。

3)なお、この「年下の子どもを助ける」という場面における子どもがどのような成長・発達をするのかに関する考察においては、「空き箱でロボットを作る」という場面において子どもがどのような成長・発達をするのかに関して考察した際のそれと同じ論理を繰り返すということになっている。とりわけ、「次の願いの形成と実現においても～において成長・発達する」という部分は、そのことが強く見られる。それゆえ以下の事項においては、この部分に関する考察と説明を割愛することにしたい。

4)だが——思いやり行動であるか否かという観点からすれば——こうした、人が困っているという場面に出会った時「人を助ける強く大きい子どもになりたい」という願いを形成し、それを実現しようとして人を助けるという行動は、もはや、思いやり行動ではない、といわなければならないだろう。もし思いやり行動とい

「子どもが自ら願いを形成し実現しようとする」ということ(2)

うものを、「相手の人の、自分の力で願いを実現したいという気持ち、また自分の力ではその願いを実現できず困っているという気持ちをよく理解、その人が自分の力で願いを実現しようすることに寄り添って助ける、その人が願いを實現して喜ぶ、その人の喜びが自分にとっても喜びとなる、という行動である」と定義するならば、この「人を助ける強く大きい子どもになりたい」という願いを形成し、そしてそれを実現しようとして人を助けるという行動は、人を助ける強く大きい自分になるために人を助ける、という行動である。それゆえ、この行動は、思いやり行動とはいえないのである。

- 5) 「空き箱でロボットを作る」という場面や「年下の子どもが空き箱でロボットを作るのを助ける」という場面において、子どもは、1) 自分から自分の力で～しようとする、2) 自分から自分の力で～した方が嬉しいということを改めて実感する、3) 次の場面においても、自分から自分の力で～しようとする、ということを通して、①「自分から自分の力で～しようとする子ども」へと自ら成長・発達する、ということが出来る。子どもは、同じようにして、②「考え、工夫して～しようとする子ども」へと、③「立ち直り挑戦して～しようとする子ども」へと自ら成長・発達する、ということが出来る。また子どもは、「年下の子どもが空き箱でロボットを作るのを思いやり助ける」という場面において、同じようにして、「人を思いやり助ける子ども」へと自ら成長・発達する、ということが出来る。

ところで、子どもが自ら形成するこうした、①「自分から自分の力で～しようとする子ども」、②「考え、工夫して～しようとする子ども」、③「立ち直り挑戦して～しようとする子ども」、さらに④「人を思いやり助ける子ども」は、これからの日本社会が求める子ども像と一致している、といえる。

平成8年7月、第15期中央教育審議会は、これからの日本社会は「国際化、情報化、科学技術の発展などが一層進展する、変化の激しい先行き不透明な時代である」と展望し、「これからの子どもたちに必要になるのは、「生きる力」であり、「教育は、学校・家庭・地域社会全体を通じて、『生きる力』をはぐくむこと」が重要であるとした。つまり、これからの日本社会が求め、教育を通してはぐくまなければならない子ども像として、「生きる力」というものを打ち出したのである。

その「生きる力」というのは、「①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力 ②自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」というものである(文部省編集「中央教育審議会答申」文部時報第1466号 平成10年 195～196頁)。

「空き箱でロボットを作る」という場面や「年下の子どもが空き箱でロボットを作るのを助ける」という場面を通して、子どもが、これこれの自分へと自ら成長・発達するとしたもののうち、①「自分から自分の力で～しようとする自分」は、「生きる力」の中の「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し……」の傍点をつけた部分と一致する。②「考え、工夫して～しようとする子ども」は、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し……」の傍点をつけた部分と一致する。また、③「立ち直り挑戦して～しようとする子ども」は、「生きる力」の中の「たくましく生きる」という部分と一致する。④「人を思いやり助ける子ども」は、「生きる力」の中の「他人を思いやる心」という部分と一致する。

このように、「空き箱でロボットを作る」場面や「年下の子どもが空き箱でロボットを作るのを助ける」という場面において子どもが自ら形成する「子ども」は、これからの日本社会が求める、したがってこれからの日本社会が教育を通してはぐくまなければならない子ども像——もちろん、そのすべての部分に渡ってではないが——と一致する。

子どもは、親・保育者から「こうしたこれからの日本社会が求める子どもに育ちなさい」と言われそれに従ってそういう子どもになったというのではない。また、子どもがこれからの日本社会においてこうした子どもが求められているということを知ってそのような子どもになろうとしたというのでもない。「空き箱でロボットを作る」という場面や「年下の子どもが空き箱でロボットを作るのを助ける」という場面において、子どもは、1) 自分から自分の力で～しようとする、(考え、工夫して～しようとする、……) 2) 自分から自分の力

で～した(考え工夫して～した、……)方が嬉しいということを改めて実感する、3)次の場面においても自分から自分の力で～しようとする(考え、工夫して～しようとする、……)。こうしたことを通して、子どもは、これからの日本社会が求める子ども像と一致する所の①「自分から自分の力で～しようとする子ども」、②「考え、工夫して～しようとする子ども」、③「立ち直り挑戦して～しようとする子ども」、さらに④「人を思いやり助ける子ども」へと自ら成長していくのである。